

倫理 - 学年末範囲末

仏教の目的（原始仏教）→ 修業によって悟りを得て、涅槃寂靜の境地に至る。

（末法思想）・・・末法という修行も成就せず悟りに達する人もいなくなる時代になる。

（日本では 1052 年～）

（浄土信仰）の流行・・・（阿弥陀仏）の救いを信じ、死後、この世の穢土を去って

仏の住む極楽浄土に往生することを願う信仰

（法然）：（浄土宗）「選択本願念仏集」

（専修念仏）・・・（「南無阿弥陀仏」）と唱える。

（親鸞）・・・「浄土真宗」

↳（絶対他力）⇔心身を得ることも、念仏を唱えることも全てが阿弥陀佛のはからいで
あって、自分自身の力でできることではない。

（悪人正機説）・・・「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」

（道元）：（曹洞宗）「正法眼蔵」

（只管打坐）・・・ただひたすらに座禅すること。身心脱落を目指す。

（修証一等） 「修」＝禅の修行、「証」＝悟りの証。

↳悟りは修行の結果でなく、座禅の修行が悟りそのものである。

（神仏習合）・・・古来からの神と仏教信仰の融合

（本地垂迹説）・・・平安時代、仏＝本地、神＝垂迹としたもの。

（諸子百家）・・・春秋戦国時代に諸国が富国強兵・人材登用をすすめたことから、
独創的な思想家が現れた。

(孔子)・・・「論語」

周の理想的な治政を復興することを目指す。

(道)・・・人の守るべき正しいあり方

(仁)・・・あるべき心のあり方

(忠)・・・自己の良心に忠実な事（真心）

(恕)・・・他人の身になって考える同情心（思いやり）

(孝)・・・親子や親族間の親愛情

(悌)・・・年少者が年長者に対して、敬意をもって従う義務

(礼)・・・人間が従うべき伝統的規範。周代の礼を復興させて、乱世を治めようとした。

(克己復礼)・・・自己の欲望を抑えて、礼を自律的に実践すること

(徳治主義)・・・孔子が理想とした(君子)による道德政治。

↳法と刑罰による法治主義を批判。

(孟子)：(性善説)・・・孔子の「仁」の教えを発展させた。

人間は誰もが4つのよい心の芽生え＝(四端)を持っている。

それを育てることができれば(四徳)を身につけることができる。

【四端】

- | | |
|--------------------------------|-----|
| ・ (惻隠の心)：他人の悲しみを見過ごすことの出来ない同情心 | → 仁 |
| ・ 羞惡の心：自他の不善を恥じ、惡を憎む心 | → 義 |
| ・ 辞讓の心：謙遜の心、他者を尊敬する心 | → 礼 |
| ・ 是非の心：善惡、不正を感じる心 | → 智 |

【四徳】

(五倫)・・・人間関係におけるあり方。

(王道政治)

(霸道)・・・武力によって民衆を支配。

(王道)・・・仁と義によって人民の幸福をはかり、諸侯の心服を得る。

(易姓革命)・・・民衆の意思に背く暴君は改めることが出来る。

(荀子)：(性悪説)・・・人はだれでも生まれつき、他人と争い他人を憎む悪い本性を持っている。

(礼治主義)・・・孔子の「礼」の教えを発展

悪い性質は礼によって矯正されなければならない。

(帰結主義)・・・行為の結果を重視→よい行為とはよい結果を生み出すような行為。

(義務論)・・・行為の結果でなく行為の動機を重視。

(功利主義)・・・創始者：(ベンサム) 18 世紀イギリス『道徳及び立法諸原理序説』

→人間：利己的で(快楽：幸福)を求め、(苦痛：不幸)を避ける。

(功利原理)・・・ある行為が快楽をもたらす場合は善であり、それを妨害するものは悪である。

(快楽計算)・・・快楽や苦痛の量は計算することが出来る。強さや持続時間など。

社会全体の幸福＝個人の幸福の総計

よい行為＝「(最大多数の最大幸福)」

↳できるだけ多くの人ができるだけ大きな快楽を得られる行為

「(自由論)」 「功利主義」：(ミル) 19 世紀イギリス

↳ 個人の自由の擁護

「人間は他人に危害を及ぼさない限り、自分の望むいかなる行為をしようとも自由である」

→ この自由は絶対の権利であって、多数派によっても侵害されてはならない。

＜個人の自由を擁護することが長期的には人間の幸福を最大化することにつながる＞

(質的功利主義) ⇄ 量的功利主義

快樂の質には違いがあり、人間は質の高い快樂と質の低い快樂を区別する。

高級：(精神的快樂) 低級：(肉体的快樂)

「満足した豚であるよりは不満を持ったソクラテスであるほうが良い。」

(義務論)：(カント) 18 世紀ドイツ

(実践理性批判)・・・よい行為かどうかは結果でなく、その行為を行う意図(動機)で決まる。

(善意志)：(道徳法則) にしたがって善をなそうとする意志。

【道徳】

× 傾向性の動機

私利、欲望、選好、必要性など

○ (義務) の動機

そうすることが正しいからという理由で行動する

道徳法則のために行動する

【道徳法則】

× (仮言命法)

「もし～ならば、～しろ/するな」：条件付きの命令

○ (定言命法)

「つねに～しろ/するな」：無条件の命令

道徳法則①

「汝の意志の（**格律**：個人的な行動の方針）がつねに同時に（**普遍的法則**）となるように行為せよ。」

道徳法則②

「汝の（**人格**）においても、あらゆる他者の（**人格**）においても、人間性を単なる手段としてではなく、つねに同時に（**目的**）として扱うように行為せよ。」

×（**他律**）：自分以外のものが下した決定に従うこと、「～ために」行動すること。
（別の目的）

○（**自律**）：自分の定めた法則（＝道徳法則）に従うこと。

↳（**自由**）→意思を自律的に決定しているときのみ。

（**ヘーゲル**）：歴史の発展は自由（**精神**）によるもの。

（**マルクス**）：歴史の発展は生産力（**物質**）によるもの＝経済

（**ヘーゲル**）：19世紀ドイツ 『精神現象学』、『法の哲学』

（**絶対精神**）：（**自由**）を本質とする。

（**歴史**）：絶対精神が、個人を道具のように動かしながら、
自由を実現していく過程。

（**弁証法**）：絶対精神は弁証法というダイナミックな論理に従って発展する。

↳ 矛盾が解消され、高次のものへと発展。（**止揚**）

（**マルクス**）：エンゲルス 19世紀ドイツ 『（**資本論**）』、『共産党宣言』

（**労働**）・・・創造的で喜ばしい自己実現の活動

人間＝（**類的存在**：他者との社会的関係の中で生きる存在）

→労働を通じて他者と連帯しながら自己を実現していく。

資本主義社会

（**生産手段**：工場や原料）の私有化

所有者⇒（**資本家**）

↓搾取

非所有者⇒（**労働者**）

労働者：自らの労働力を売り、資本家に雇われる。



生産物は資本家のものとなり、労働は非人間的で強制されたものになる。

→ (労働の疎外)

社会主義社会

生産手段の (共有化)

→ 私有を廃止し、労働者全体の共有にする。

歴史：(唯物史観)

生産力が歴史の発展の原動力、弁証法的唯物論。

「人間の (社会的存在) が人間の (意識) を規定する。」

(生産様式：古代奴隷制、中世封建制、近代資本主義など)

→ (生産力) 労働力 + 生産手段 → 発展 (技術の習熟、進歩)

⇓ 矛盾

→ (生産関係) 領主と農奴、資本家と労働者 → 固定化

生産様式 = (下部構造：経済)

イデオロギー制度 = (上部構造：社会制度)

→ 下部構造が上部構造を決定する。

生産力と生産関係の矛盾 → (階級闘争)

支配者階級 vs 被支配者階級 → (社会革命) → 新しい生産関係



資本主義

資本家階級 vs 労働者階級

(ブルジョワジー) (プロレタリアート)



(社会主義革命：プロレタリア革命)



(社会主義：能力に応じて働き労働に応じて分配)



(共産主義：能力に応じて働き必要に応じて分配)

(ニーチェ)：19世紀ドイツ (『ツァラトゥストラはかく語りき』)『権力への意志』

19世紀後半以降、伝統的な価値観や権威が失われた→(ニヒリズム：虚無主義)

→世界は無意味なものになり、人生の意味も見失われる状況。

(「神は死んだ」)：キリスト教の価値観が失われた。

キリスト教批判

ギリシアの価値観

よい：「優良」(力、勇気、自尊心)

悪い：「劣悪」(優良な要素が少ない)

→(貴族道徳)

近代の価値観

よい：「善良」(他者の利益の配慮、同情、憐れみ)

悪い：「他者を顧みず、自らの善を要求

→(奴隷道徳)

奴隷道徳の背景

(「ルサンチマン」)：うらみ、やっかみ、反感

→力、勇気などを持つ者に対する持たないものの報復

キリスト教：弱く従順な者が神に救われる。

→人間の力が弱くなり、ニヒリズムへと陥った。

ニヒリズムを克服するためには

（「**永劫回帰**」）：世界には意味も目的もなく、同じことが繰り返される。

（「**権力への意志**」）：自分を乗り越えより強大になり成長していこうとする生の意志

→生をありのままに肯定する態度。

（「**超人**」）：「権力への意志」に基づいて自己を乗り越え、既存の価値を覆し、

新しい価値を創造する人間、永劫回帰に耐え、運命を愛する人。